

地域の歴史を学ぶ

—— 歴史(郷土史)関係講座を中心に ——

三重野 勝 人

はじめに — ある郷土史講座の由来 —

今、私がかかわっている郷土史の講座(以下『郷土史講座』・於別府市中央公民館)は、大分県教育界に大きな足跡を残し、大分県生涯教育センター(別府市野口原)初代所長を務められた故藤原正恭先生が、昭和六二年に『大分県ニューライフプラザ』(同地)主催の郷土史講座を担当したことが縁となってスタートした。ついですがニューライフプラザの郷土史講座について簡単にふれておくと、創始は、同年一〇月五日で、最初の講師は藤原正恭先生であった。『郷土史講座』は、藤原先生亡き後も、ニューライフや講座生、その他関係者の熱意とによって今日まで、一三年間にわたって自主的に継続されている。本題にもどろう。『郷土史講座』は、市民講座生によって自主的に運営されている。講師の選定、スケジュールの立案・関係機関との連絡、学習室の確保、講座生の掌握などがすべて講座生によってなされている。まさに字義どおりの「自主講座」で、これが理想とされる生涯学習のスタイルではないかとの感を深くしている。

生涯教育機関として独自の活動をしている別府市の施設「ふれあい広場・サザンクロス」では、生涯学習の単位講座として、「主催講座」と「自主講座」の二種を設定している。

「主催講座」は、施設側が市民のニーズに意を払いながら、主体的に講座を企画運営するもので、具体的には施設が、全講

座の構成や単位講座(テーマ)、年間スケジュール及び時間配分、講師、講座生募集員数、会費などを決め、さらには講師・講座生相互の理解と親睦をはかり、講座終了後も自主講座への移行をも視野に入れて運営している。

これに対して「自主講座」は、「主催講座」から移行したものと、任意の個人または団体が、施設(講座室・機器など)を借用して開く講座である。そのほとんどは茶道・生花・香道・書道・水墨・和楽器・歌謡・料理などの技能・芸能を習得する分野と、俳句・短歌・川柳などの限られた文芸の分野によって占められる。

この背景には、デスクワークを中心とした純粹に学問的な分野、例えば文学(古典・現代文・万葉などの詩歌)、歴史(通史・古典解説・考古学・郷土史・人物史など)、思想・人生学などや、自然や環境保護にかかわる講座などは、学習内容が専門的になり勝ちなこと、担当講師によっては講座の魅力が極端に損なわれるなどのことから、「自主講座」として継続するには難点があるという事情がある。加えて講師への謝礼・施設借用費などの必要経費の調達(会費徴収が普通)には、それ相応の講座生確保が前提となるので、この分野は主に「主催講座」に編成することで市民に学習機会を提供している。

『郷土史講座』は、このような意味からすると、純粹に「自主講座」(施設借用)として一〇余年の歩みを刻んだのであるから、関係者ことに講座生の学習に対する熱意と努力には、唯々敬服するばかりである。

講座生の種々相

生涯学習に情熱を燃やす講座生の多くは、人生を長く歩んだ経験豊かな熟年、男性の場合は社会の第一線を退いた還暦以上の人が多く、女性の場合は、これに子育てから開放された中年世代の人たちが加わる。

このうち所謂高齢者に属する世代は、青年期の一四、五歳から二四、五歳までの何年かを戦争の最中で過ごし、出征・徴用・学徒勤労動員などで、かけがえのない青春を犠牲にした人たちからなっている。教育の観点から見れば、この世代は、現在の中学・高校・大学にわたる時期に、教育を受ける機会や学問にいそしむ機会を奪われた世代である。仮に不十分ながらそのよ

うな機会に恵まれたとしても、英語が敵性語として授業禁止になった例に見られるように、軍国的な制約の下では満足のいく授業を受けることは不可能であった。このような意味では、現在の高齢者は、潜在的に知的欲求不満（ハングリ）の状態におかれていたと云っても過言ではない。

七〇歳前後の人によく聞くことであるが、生涯学習にいそむのは何故か、男女を問わず返ってくる言葉は、「戦争中の勉強不足を取り返したいから」、「戦後ずっと思い続けて果たせなかった夢を何とかかなえたいから」という意味のことが大部分である。講座生の経歴は、主婦、一般社員、教育関係者、技術者、自営業者、専門職経験者、各界管理職経験者など多様であるが、戦争によって知的欲求不満の状態におかれた経験を持つという点では共通している。国文学を通し、長期にわたる生涯教育に携わっている某大学教授の話では、現在、講座生は少しずつ入れ替わり世代交替が進んでいるが、学習意欲という点から見れば、この世代の右に出るものは今後とも現れないのではないか、との感慨を抱いている由である。

歴史遍歴という観点から見ると、この世代は筆者も含め、初等・中等教育の段階で、皇国史観に貫かれた「国史」の授業を体験している。

皇国史観とは、①『古事記』・『日本書紀』の記述を史実として絶対視する、②神話と史実を混同する、③大和朝廷を美化する、④天皇と天皇家の消長を中心に歴史を描く、⑤近代における天皇制と対外侵略を合理化するなどのことを特徴とする。このような歴史観は、日本国憲法や教育基本法に基づく学校教育や、社会教育を通して克服されてはきたが、しかし高齢者世代にあっては、なお皇国史観が完全に払拭されたとは言い切れないであろう。

正しい歴史認識のための生涯学習

社会人が、正しい歴史と歴史観を習得するためには、それを可能にする学習の場がなければならない。それに応えるのが生涯学習である。生涯学習で歴史を学ぶ人たちの中には、郷土史に高い関心を抱き、史跡の見学や研究会・講演会へ積極的に参

加し、あるいは文献資料などにも熱心に目を通してゐる人も少なくない。しかし、中には時として伝説・伝承・伝聞などを、そのまま史実と混同して受け止める人もいないではない。

郷土に残された歴史関係の諸資料や刊行物は、市町村史・詩や県史をひもとく上で大切な史料である。しかし、郷土史愛好家に、これら資料に正しく対処する視点がなければ、折角の郷土史に対する熱意も成果を生まず、反って正しい歴史理解を妨げることになる。したがって講師など指導的な立場で生涯学習に携わる関係者は、このような講座生の実態に十分に意を払い、自らが正しい歴史認識確立に努めなければならない。まずは歴史書や研究論文の執筆、あるいは教材を作成するにあたり、言葉通り実証を重んじる姿勢を貫くことに徹しなければならないであろう。定説・異説・未詳の別を具体的に明らかにし、残された今後の研究課題にまで言及できれば最善であろう。

歴史の重みや、歴史研究の魅力は、このような配慮の積み重ねによって、講座生に肌で伝わり、ひいては郷土史研究の裾野を一層広げることに貢献すると思われる。郷土史関係の刊行書を読んで見ると、時代が遡るにつれて残存資料が少なく、また同一の歴史事象についても異説が多くなるという実態が浮かび上がる。このためであろう、特定の歴史事象について史実の確定が出来ず、推論で終わっている論述にもしばしば出会う。それはそれとして良しとしなければならないが、中には推論を土台としてその上にさらに次々と推論を重ねている論稿や、資料不足にもかかわらず断定的に無理な結論を導いた論稿、さらには資料評価が一面に偏って妥当性を欠くものなど、拙速のきらいを免れない論稿に出会うことがある。いずれも読者の正しい歴史理解を妨げるもので、自戒の意味を込めて猛省すべきことでもある。

豊かな人生経験に応える教材の準備

熟年以上の人生経験豊かな世代は、生涯学習に何を求めているのか。これを郷土史学習の場を通して見ると、ひたすら歴史の教養を身につけたいと望んでいる人もあれば、もっと深く専門的に歴史を掘り下げて見たいと考えている人もある。しかし、

いずれにも共通しているのは、特に興味関心のある事象については、納得のいくまで理解を深めたいと期待していることである。ことにそれぞれの時代の人間の生きざまや、文化(思想・宗教・文学・建築・美術など)に関する学習では、内容が講座生の実人生に重なる部分が多い故か、精神的に深く受け止めている印象が強い。

このような講座生の期待に応えるには、それに相応する教材の作成に努めることが肝要である。その一は、歴史の現実を最もリアルに伝え、歴史を身近に体験できる原資料を活用することである。そのためには、次の諸点を選択基準として資料準備にあたるべきであろう。①史実を歪めない、②歴史理解を一層深める、③歴史に対する感動・共感を喚起する、④人生観に何かの示唆を与える、などがそれである。

生涯学習としての歴史学習を魅力あるものにするには、講師の口を通してのみ歴史を語るだけでは不十分である。面倒でも資料をコピーまたは活字にして講座生に提示し、講座生が当時を生きた人々の痕跡(文章などに直接向き合えるよう配慮することが大切である。『郷土史講座』で採り上げた主な資料(安土桃山時代まで)は次のようなものである。

国生み神話(「古事記」) 豊国の呼称(「豊後風土記」) 万葉集(大津皇子・額田王・天武天皇) 漢詩(菅原道真) 古今和歌集(六歌仙の作) 平等院武士の台頭(「類聚三代格」) 承平天慶の乱(「扶桑略記」) 源頼義(「陸奥話記」) 緒方氏神婚説話(「平家物語」) 武士の台頭(太宰府管内「太政官符」)

保元の乱(「保元物語」) 羅城門登上層見死人盗人語(「今昔物語」) 富士川の戦い(「吾妻鏡」) 平家都落ち(「玉葉」) 臼杵・緒方の源氏支援(「吾妻鏡」) 平氏滅亡(「吾妻鏡」) 執権北条時頼(謡曲「鉢の木」) 時頼の質素(「徒然草」) 元寇(「八幡愚童訓」) 漢詩(元使何文著偶) 二毛作(新編追加) 浄土宗(「一枚起請文」) 浄土真宗「本願寺聖人親鸞伝絵」) 無学祖元(「元亨釈書」) 座禅(「普勧座禅儀」) 新古今和歌集(代表的歌人作) 無常観(「徒然草」) 鎌倉幕府滅亡(「梅松論」) 建武の新政(「太平記」) 連歌(「筑波問答」) 足利学校(「鎌倉太草紙」) 武家の学問(「大乘院寺社雜事記」) 能楽(「風姿花伝」) 茶の湯の精神(「茶亨之記」) 作庭の理念(「扶桑捨葉集」) 竜安寺石庭(「碑文」) 北条一門滅亡(「梅松論」) 金閣(「後鑑」) 足利義満権勢(「足利治乱記」) 寛正の飢饉(「碧山日録」) 桃山建築(「落穂集」)・「事蹟台考」) 茶の湯佐の本意

重視すべき「レジュメ」の役割

生涯学習では、講座生に高齢者が多く、学歴・学習歴のみならず病歴・健康度も多様である。また現役の学生・生徒と異なり、教科書もなく講師の準備したレジュメや資料で熱心に学習に取り組んでいるのが現実である。これまで県下各地で講師を務めた経験では、講座生の学習内容に対する理解力には極端な差はないとの印象を強く受ける。しかし歴史に関する知識の有無、あるいは身体的な条件―例えば視力・聴力・筆記力などには、非常に大きな個人差があることは否定できない。

この現実を踏まえ、学習を効果的に進めるにはどうすればよいのか。それには、詳細なレジュメを台本とした学習スタイルに切り替えることも効果的であると考えられる。この場合、具体的なレジュメ作成にあたっては、①書写不可能の講座生にも講義内容が理解出来る、②書写の負担を減少させるため記入事項を必要最小限に止める、③視力を考慮し活字はポイントを大きくする、④余白を多くし見やすくする、⑤資料などを活用して学習の流れを円滑にする、などに配慮することが大切であろう。

生涯学習に携わってきた某元市立図書館長が、「生涯学習では、講義の時間中に、同じ事を何度か、しかも声は大きく明瞭に、繰り返し話すことが鉄則である」という意味のことを筆者に語ってくれたことがある。それは高齢者の多い生涯学習の現実から引き出された教訓である。

みんなが参加できる現地研修の工夫

郷土史を学ぶ者にとって、現地学習(フィールドワーク)は、欠かせない魅力的な学習の場である。しかし、折角の現地学習

《事例》 現地学習(ふれあい広場・サザンクロス講座文集『南十字星』より)

六八

年度	テ	マ	現	地	学	習	講	師												
1	北別府の史跡		朝見八幡	朝見浄水場	河内谷	鳥越峠	石城寺	元市立別府図書館長 西村武人												
2	別府の近代建築		旧西庁舎	平尾邸	中央公民館	京大物理学研究所	中山別荘	大分住宅研究室長 村松幸彦												
3	六郷満山仏教文化 ふるさとの文学碑 (鉄幹と晶子)		夷溪谷(霊山寺・実相寺・奥の院)	天念寺	長安寺	両子寺	久住高原	別府大学教授 賀川光夫 倉田紘文												
5	福沢諭吉とそのふるさと 美しさを感じる石橋と自然		合元寺	福澤旧居	中津城	赤松橋	院内鳥居橋	御杵橋	福厳寺羅漢橋	久地橋	富士見橋	分寺橋								
7	臼杵城とその周辺 日出陽谷城址 要害岡城		稲葉下屋敷	臼杵城址	仁王座	歴史の道	野上弥生子文学記念館	龍原寺五重塔	臼杵石仏	ヤマコ美術博物館	松屋寺	帆足万里の墓所	龍泉寺	致道館	陽谷城址	的山荘	野津原・今市石畳道	岡城址	武家屋敷跡・旧竹田荘・瀧廉太郎記念館	岡藩主おたまや公園
8	佐賀関と早吸日女神社 耶馬溪と羅漢寺		教導寺	築山古墳	早吸日女神社	関崎海星館	中津歴史民俗資料館	村上医家史料館	池大雅堂	中津城壁	青の洞門	羅漢寺	宇佐八幡	富貴寺	熊野歴崖仏	両子寺				
9	宇佐神宮の森と国東の自然 石造美術品の種類と特色		笠塔婆・西野口五輪塔婆	竈門氏墓地五輪塔	向原石幢	国東塔	御嶽権現社宝塔	元県立宇佐風土記の丘館長	須股博信	後藤正二										

も、講座生が事前に史跡に関する歴史を学び（デスクワーク）、予備知識を持って臨むのでなければ、十分な成果を期待することはできないであろう。

さきの「ふれあい広場・サザンクロス」には、郷土史関係の講座に『ふるさとガイド』がある。この講座では、開設以来一〇余年の間、デスクワークとフィールドワークをうまく組み合わせスケジュールを組み、毎年一〇〇名前後の講座生を集めている。このうちの教例を参考までに表示したが、年間三〜五回の現地学習にはほぼ八〜九割の講座生が参加している。

この人気の秘密はどこにあるのか。その一は、デスクワークにフィールドワークが伴っていることである。その二は、施設側が高齢者のおかれている実態を十分考慮して、その企画・立案・実施に当たっているからである。

高齢者の場合、個人で私的に史跡見学に行ける人は非常に少ない。その理由として次のことが挙げられる。①史跡への不案内、②交通機関利用の複雑さと時間的制約、③交通費その他の費用の負担、④健康上の不安、⑤ガイド確保の困難、などがそれである。このうち最も高齢者を消極的にさせているのは、「健康上の不安」である。循環器系などの各種疾病及びその後遺症・筋力脚力の低下その他老衰などによって不自由な生活を送っている人は、単独での外出を厭う傾向があり、歩行機能に障害を持つ人はなおのことである。

このような実態に即し、主催者がどのような点に配慮すべきかを、「ふれあい広場・サザンクロス」の実践例を参考にして列記すれば、次の諸点にまとめられる。①貸し切りバスなど安価な移動手段の確保、②専門ガイド（講師）の招請、③病弱者・障害者にも見学可能な史跡の選定、④高齢者の健康を配慮したスケジュールの策定。

学習仲間が道連れというだけで、楽しい語らいを予想する高齢者のことであるから、主催者側の前記のような配慮があれば、高齢者は安心して一層積極的に野外学習にも加わるようになるのではなかろうか。「ふれあい広場・サザンクロス」の実践例はこのことを如実に物語っているように思える。

講師の確保と情報収集

生涯学習を魅力あるものにするには、当該テーマに詳しい講師を確保することが第一の要件である。しかし現実には、学界の実情に不案内なことから、講師の確保に苦勞している施設・団体が少なくない。

現在全県的には、大分県生涯教育センターが市町村教育委員会に講師の登録を依頼し、それをもとに講師名簿を作成して各教育委員会に配布している。しかし、この制度は、登録される講師の員数がまだまだ少ないなど、十分に効果を発揮していないくらいがあり、今後とも関係機関の継続的な努力が望まれている。

しかし、講座の内容に照らし講師を選定するとなると、講師の特性なども考慮しなければならないから、行政側から提供されるデータだけに依存するには限界がある。したがって併せて、講師情報に詳しい大学、教育・文化関係機関に問い合わせることも大切である。現在利用できる関係機関を列記すると次のようなものがある。

公共機関

大分県立先哲史料館・大分県教育長文化課・大分県立歴史博物館(宇佐)

大分県立芸術会館・大分市歴史資料館・市町村教育委員会(社会教育課など)

任意団体

大分県地方史研究会・市町村郷土史研究会(例)宇佐・臼杵・佐伯史談会など

本誌読者で若し講師の件で問われることがあった場合は、以上のことをお伝え願えば少しは講師の確保に貢献できると思われる。

スケジュールの策定

最後にスケジュールの策定についてふれておきたい。『郷土史講座』のスケジュールは、三カ月に五回の割り振りで年間学習を終わることになっている。隔週二回の月が二カ月、月一回が一カ月となる。「ふれあい広場・サザンクロス」の場合は、

一講座年間一〇回程度である。月に一回または隔週に開講するということは、大きな意味があるように思われる。

その一は、講座生の現実に適合していることである。講座生の中には、一人で二講座、三講座と掛け持ちで勉強してくる人も多く、そのための時間も出来るだけ確保したいとの思いがある。また講座の掛け持ちはしないが、単発の研究会や講演会、現地説明会などに積極的に参加する人も多い。ちなみに『郷土史講座』の講座生には、そのような人が何人もいて、常に公民館の掲示案内や新聞の文化欄などに注意を払い、お互いに情報を交換したり日程を打ち合わせたりしている。その他非常勤で勤務しながら学ぶ人もあり、講座生にとっては余裕のある生涯学習が望ましいのである。

その二は、講師の立場からみても、スケジュールに余裕のあることは望ましいことであろう。仮に多忙であっても、なお教材研究や準備にかなりの時間を割くことが出来るからである。講師に時間的余裕がなければ、魅力ある講座の実現は期待できない。

おわりに

以上生涯学習、ことに歴史(郷土史)分野について思いつくまゝを記したが、終わりに学校における教科学習と生涯学習との基本的な違いについて感じたことを述べて結びとしたい。両者の基本的な相違点は、前者が、将来社会人として生きるための基礎学力や進路開拓のための学力養成を目的とし、いわば手段としての学習の側面が大きいのに対し、後者は学習し習得すること自体を目的とし、手段と目的が一体化していることにある。

歴史について正しい知識を身につけ、その生成・発展・消滅の過程を理解し、そこに繰り広げられる人間社会の劇的な展開に心を動かし、講座の仲間とともに歴史を学ぶ喜びを共有する。これが生涯学習の目的でもあり醍醐味でもある。生涯学習は「今日の生を生きる」ために学ぶもの、したがって「明日のために」という言葉は要らないように思える。

(別府市緑丘町11組)